

【発表論文】

魔灯鏡影：18-20 世紀の中国における 幻灯の初期放映、製作と伝播

孫 青

[原文は中国語、翻訳：宋 剛]

17世紀半ば、ヨーロッパでは凸レンズを用いた投影装置が誕生した。最初は「幻」や「神跡」の再現に使用され、目に見えない超越的な存在を視覚で捕捉させる役割を果たした。当時、幻灯機はその観客たちに「恐れられる燈籠 (*lanterne de peur*)」¹と呼ばれた。間もなく学者や旅芸人、職人、イエズス会の宣教師、光学者たちなどの遊動する足跡をたどって、あっという間にヨーロッパ全域に広がり、バロック時代の宣教師とマジシャンに愛用されるようになった。神の仕業に密接にかかわったためか、「マジック・ランタン (*Magic lantern*)」という名称が定着した²。「マジック・ランタン」はイエズス会の行動や海外貿易のルートで中国にも入り、宮廷と一部の教会で演じられ、面白い光学おもちゃになった³。

17世紀末、マジック・ランタンは中国伝来にともない、宗教的な意味が含まれる光学おもちゃから、西洋の科学と実証主義の精神を物語る教育道具になり、大衆伝播のメディアとしての役割を果たした。中国と西洋の交流という視点から、異なる階層や地域、社会文化におけるマジック・ランタンの役割の変化とそれに伴って生じた影響を明らかにすることは、中国における「現代性」の生成の究明に良い糸口となると思われる⁴。

¹1664年、フランス国王ルイ十四の宮廷顧問数学家 Pierre Petit がパリでマジック・ランタンショーを見学した時、この装置を「cette lanterne de peur」(恐れられる燈籠)と言った。その後、フランス語では「la lanterne magique」(マジック・ランタン)で同じ装置を指し、英語の「magic lantern」とはかなり類似している。それで流行ってきて、定着してきた。

²マジック・ランタンの投影術の西洋における発展は Laurent Mannoni, R. Crangle (eds. and tr.,) *The Great Art of Light and Shadow: Archeology of the Cinema*, (Exeter: 2000), pp46-73. *Magic Lantern society: New Magic Lantern Journal*. をご参照ください。また、マジック・ランタンの西洋における文化史については Koen Vermeir, *The magic of the magic lantern (1660-1700): on analogical demonstration and the visualization of the invisible*, *The British Journal for the History of Science*, Vol.38, No.2, (Cambridge: Cambridge University Press, 2005) pp.127-159 を参照してください。

³石云里『おもちゃから科学へ：ヨーロッパの光学おもちゃの清朝における流通と影響』、『科学文化評論』2013年第2号。

⁴先行研究は科学史や技術史、教育史として概括的に論じられている。器物の現地化応用に関してはその具体的な歴史変遷がまだ解明されていない。17世紀から20世紀にかけて、magic lantern が中国の近代化における具体的な役割に関する研究は更に少ない。石云里『おもちゃから科学へ：ヨーロッパの光学おもちゃの清朝における流通と影響』、『科学文化評論』2013年第2号；姜振寰『〈中西見聞録〉と近代技術の清末での伝播』、『技術の

いわゆる外部の世界から伝来した瞬間から、マジック・ランタンに「偏移」、つまり「現地化」が発生した。このような現地化は、マジック・ランタンに付けられた名称から映写時の内容まで、神の仕業から人の世の娯楽や情報伝達、知識、或いは経験主義に基づく理性的な認知への転向が見られる。中国現代教育の改革に直面する今、幻灯機は学校教育にとって重要な教具と知識の表現手段になっている。また、「幻灯講演」という教育普及と民衆を相手とした講演様式への転換は、エリート層にとって、共同体内部からより大衆的な方向へという、言説の発信者と場の重大変化を意味する。近代中国にとって、教育の工業化は「文化の一般化」に未曾有の速度と範囲をもたらしただけでなく、グローバルゼーションにおける民族の知識の新世界を作り出してきた。

1 マジック・ランタンの伝来初期の中国名

(一) 「幻灯」という訳語が広がるまで

五埠頭通商（アヘン戦争後、「南京条約」に基づき五つの沿岸都市が対外貿易を許容するという不平等条約の内容、訳者注）までのマジック・ランタンの中国名を見れば、その大多数は「鏡」、「影」、「照」、「ガラス」、「字」、「画」に関係する一方、「魔」や「幻」を示す字は用いられなかった。史料での記録はほとんど1841年の通商条約以降のものであり、主に上海をはじめとする埠頭都市での筆記、報道、光学著作に集中して現れている。文献に現れた名称として、「放字鏡」、「鏡影灯」、「影灯」、「取影灯戲」、「射影灯」、「影戲」、「外国影戲」を含めて多数ある。このように、「鏡」や「影」のほか、「灯」も主要な名称用語になり、更に「戲」もその重要なシンボルになったのは、当時の認知では、パフォーマンスと娯楽がその主な使い道だからと推測できる。

一般的な中国語史料の他、19世紀以降に数多く現れた二か国語辞書にも、編纂者が各地で観察し収集した言語現象を集積・総括・伝播した。これらの辞書は最初は宣教師たちによって作られたもので、西洋言語の中国語訳を列挙し、西洋人の中国語学習のためのものであった。1870年代から、各地の教会学校や新型学堂で外国語の授業が設けられるようになり、西洋人の牧師だけでなく、邝其照など中国籍の宣教師も辞書の編纂に携わりはじめた。今度は中国語を西洋の言語に訳して、中国人の外国語学習に役立つ辞書になった。このように、上記の辞書はマジック・ランタンの中国名を考証するための重要な史料になった。

伝承と移転』、中国科学技術出版社 2012 年版、p197—199；孫承晟『明清における西洋の光学知識の中国での伝播とその影響——孫云球〈鏡史〉研究』、『自然科学史研究』2007 年第 3 号；余子侠、喬金霞、余文都『宣教師と近代中国電気教育の始まり』、『華中師範大学学报（人文社会科学面）』2015 年第 1 号；沈書生『清末民初的電気教育成因探析』、『電気教育研究』2010 年第 11 号；孫慧『幻灯から映画へ：〈申報〉初期映像広告研究（1872—1913）』、博士学位論文、南京芸術学院、2016 年；Laurent Mannoni, *The Great Art of Light and Shadow*; Koen Vermeir, *The magic of the magic lantern (1660-1700)*. Roberta Wue: *China in the World: On Photography, Montages, and the Magic Lantern, History of Photography*, 41:2, pp.171-187. ; David Wright: John Fryer and the Shanghai Polytechnic: making space for science in nineteenth-century China, *The British Journal for the History of Science*, Vol. 29, No. 1, (Cambridge: Cambridge University Press, 1996) pp. 1-16。

まず、華英字典について。1807年、スコットランド宣教師マリソン (Robert Morrison, 1789—1834) がロンドン教会から中国に派遣された。1815年から1823年の間、マカオで英華・華英字典、計3部6巻が出版された。これらは中国で最古の英漢字典である⁵。『マリソン字典』では、第2部の「鏡」と「照」の項目に「千里鏡」と「顕微鏡」が収録されたのみである⁶。その次に流行っていた華英字典として、メッドウースト (Medhurst, Walter Henry, 1796-1857) の『華英字典』 (1842—1843)、サームエル・ウィリアムズ (Samuel Wells Williams, 1812—1884) の『英華分韻撮要』 (1856) などがあるが、その「鏡」、「火」、「灯」、「照」、「幻」の項目には「マジック・ランタン」と関係のある言葉が収録されておらず、ただ「千里鏡」や「顕微鏡」などが多くの場合「鏡」に収録され、英訳が付けられた。

一方で、英華字典では状況がかなり異なる。1847年から1848年にかけて、英語宣教師メッドウーストは『康熙字典』に基づき、マリソン字典を参考しながら、2巻からなる『英華字典』を編纂した。その「Magic」項目に英単語の「Magic Lantern」が収録され、「玻璃影画鏡」に訳された⁷。1872年、アメリカ戦況しジュスタス (Doolittle, Justus, 1824—1880) の『英華萃林韻府』2巻が福州で出版され、その「Magic」項目にも「Magic Lantern」が収録され、同じく「玻璃影画鏡」に訳された⁸。

1866年から1869年にかけて、ドイツ宣教師ロシャイド (Lobscheid, Wilhelm, 1822—1893) が編纂した4巻からなる『英華字典』 (*English and Chinese Dictionary with the Punti and Mandarin Pronunciation*) が香港で出版された⁹。「Magic Lantern」は「影画鏡」と訳され、さらに広東語の発音 *ying wa keng* と官話の発音 *ying hwa king* が表記されている¹⁰。1884年、井上鉄次郎がロシャイドの字典を再編した際¹¹、ロシャイドの「影画鏡」と並んで、「射影鏡」という新しい漢語訳を付け加えた。そして、井上が付けた「射影灯」は1937年の頃も日常的に使用されていた。

1908年、顔惠慶の『英華大辞典』では、「Magic, Magical」項目で「Magic Lantern」が収録され、その中国語訳として「影戲灯、射影灯、幻戲灯」がある¹²。1913年、商務印書館出版の『英華新字典』では、同じく「Magic, Magical」項目で「Magic Lantern」があり、その中国語訳として「射影鏡」、「影戲灯」があった¹³。

⁵沈国威：『近代英華華英辞典解題』、大阪、関西大学出版部 2011 年版。

⁶Robert Morrison, *A Dictionary of the Chinese Language in Three Parts. Part the Second, Chinese and English, arranged alphabetically, Vol. I.* (Macau: The Honorable East India Company's Press, 1819), p467, p.548.

⁷Walter Henry Medhurst, *English and Chinese Dictionary* (Shanghai: Printed at the Mission Press, 1847-1848), p814.

⁸Justus Doolittle, *Vocabulary and Hand-book of the Chinese Language* (英華萃林韻府) (Foochow: Rozario, Marcal and Company, 1872.), p.295.

⁹沈国威は、本書は英単語を主として、ロシャイドが正音系統に基づいて広東方言(Punti)と官話に発音を付けて、そのアルファベット順に並べたもので、英単語に対応する中国語の言葉が一つから数個になる。アメリカの『ウェブスター辞典』から英単語を選んで、合計5万語を超える項目が収録された。その翻訳として載せられた感じが六十万余りに上るとした。沈国威『近代英華華英辞典解題』。

¹⁰Wilhelm Lobscheid, *English and Chinese Dictionary with the Punti and Mandarin Pronunciation* (Hong Kong: The Daily press office, 1866-1869).

¹¹井上哲次郎：『訂増英華字典』、東京 1884 年版、藤本次右衛門藏、p696。

¹²顔惠慶：『英華大辞典』 (*An English and Chinese Standard Dictionary*)、商務印書館 1908 年版。

¹³商務印書館編訳所：『英華新字典』 (*English and Chinese Pronouncing Condensed Dictionary*)、商務印書館 1913 年版、p311。

上記の英華字典を見れば、マジック・ランタンには中国語の官話訳語があったことがわかる。そして、当時流行の方言英華字典には、方言の名称もいくつか収録された。1876年アメリカ宣教師モリソン(William T. Morrison)が『寧波方言字語会解』(*An Anglo-Chinese Vocabulary of the Ningpo Dialect*)を編集し、上海美華書館(American Presbyterian Mission Press)で出版した¹⁴。1883年、イギリスロンドン会の宣教師マックゴワン(John Macgowan, 1835—1922)が『厦門方言英華詞典』(*English and Chinese dictionary of the Amoy Dialect*)を編集・出版した。¹⁵

このように、史料における比較的定着した西洋語で表されたこのレンズ投影装置は、中国語訳の中で「幻」や「魔」などに関連付けられたことがなく、むしろ「鏡」や「灯」、「影」、「戲」といった現地にもともとあった事物の名称が用いられていたことがわかる。そして、ほとんど全ての英華・華英字典で、「magic」という言葉は漢字の「幻」と対応されたにもかかわらず、このような対訳関係は明らかに「magic」が含まれた「magic lantern」という語に応用されなかった。非常に興味深い現象である。

(二) 「幻灯」の出現と流行

1891年、『申報』に「蛤洲記勝」を題とした日本関係の記事が載せられた。中では、愛知県、岐阜県、福井県の地震後、長崎の「紳商」が「幻灯会」を催して寄付金を集めた。会では中国や日本、西洋の音楽を流しながら「幻灯」を上映し、「今回の震災の惨状と古今の珍しい事」を展示したと紹介し、「幻灯」が中国の「影戲之類也」と括った¹⁶。

1899年、『申報』の日本ニュースで、「とある日に幻灯会を関帝廟岳帝廟などで催し、本島の居住者に衛生の術を漸く解するよう欲する」として、また「幻灯とは華人が言う影戲なり」とした¹⁷。

上記の記事から、1890年代の中国語文脈で、マジック・ランタンの最も流行った名称が「影戲」で、日本のニュースを伝える時だけ、相手の用語「幻灯」を意識したことがわかる。

実際、1862年に日本で出版された『英和对訳袖珍辞典』(*A Pocket Dictionary Of The English And Japanese Language*)では、「幻灯」が英単語「Magic Lantern」の唯一の訳語として定着された¹⁸。このことから、漢字語「幻灯」が日本語の文脈でマジック・ランタンの訳語になったのは1860年代以前のことであろう。

1902年、日本の英学新志社が東京で出版した『英和双解熟語大字彙』(*A Dictionary of English Phrases*

¹⁴William T.Morrison, *An Anglo-Chinese Vocabulary of the Ningpo Dialect* (『寧波方言字語彙解』) (Shanghai : American Presbyterian Mission Press, 1876),p284.

¹⁵John Macgowan, *English and Chinese Dictionary of the Amoy Dialect* (Amoy: A. A. Marcal, London: TRUBNER & Co.,1883),P.288.

¹⁶『蛤洲記勝』、『申報』、1891年12月14日、第3面。

¹⁷『赤嵌近事』、『申報』、1899年12月31日、第2面。

¹⁸『英和对訳袖珍辞典』(*A Pocket Dictionary Of The English And Japanese Language*)、文久二年(1862)江戸開板本、日本早稲田大学蔵、p475。

with illustrative sentences) ¹⁹では、英語の「Magic Lantern」について「幻灯」と訳された。

1916年、ドイツ人ヘメリング (Hemeling, Karl Ernst Georg, 1878—1925) が『官話』で、「Lantern」の下に「Magic Lantern」と「Magic Lantern slide」を入れ、「射影灯」を新造語、「幻灯」を部定語として訳語に入れた²⁰。

このように、20世紀初期、日本から伝来した漢字語「幻灯」はだんだん中国で受け入れられた。その後、「幻灯」と「影戲」が並行して使われる時期が続いた。1927年前後、「幻灯」が完全に他の訳語を上回り、マジック・ランタンの正式な訳語として定着した。

2 中国で「マジック・ランタン」に最初に遭遇した場面

(一) 17世紀：光学おもちゃ

マジック・ランタンは17世紀にヨーロッパで誕生したのち、間もなく中国に伝来した。1671年から1672年にかけて、閔明我や南懷仁 (Ferdinand Verbiest S.J.) をはじめとするイエズス会の宣教師たちがマジック・ランタンを面白い光学おもちゃとして皇帝に進呈した²¹ことがある。フランス人宣教師のド・ハルド (Jean-Baptiste du Halde, 1674—1743) がその『中華帝国全志』でイエズス会の宣教師らが中国の皇帝に光学知識を伝授し、光学装置を見せる光景を描いた。

19世紀に入ると、蘇州や揚州、南京などの民間の催しでマジック・ランタンが広く使われるようになった。1846年、鄭復光は十年も前に「邗上」（現在の江蘇省揚州市邗江区）で「取影灯戲」を見学し、大変面白くなって光学の研究を始めたと回想している²²。また、王韜や葛元煦も上海での「影戲」見学について詳しい記録を残しているが、埠頭都市で流行っていた主要な娯楽の一つと記している。影戲の演目は西洋の鳥獣魚や人物、自然風景、泰西の名物の他に、火災、嵐など天災に巻き込まれた帆船の様子なども観客に人気である。葛元煦は「影戲」で西洋諸国の戦争の様子を見ることにも言及している。

このように、17世紀半ばから19世紀半ばにかけて、マジック・ランタンは宮廷から民間まで広がって、主に娯楽用の装置として登場した。ヨーロッパのように「幻」や「神の仕業」を見せることで人々から畏怖や敬意、或いは超越的な事物への想像を呼び起こすという役割はしていなかった。

¹⁹ 英学新志社：『英和双解熟語大字彙』、東京、1902年版、p274。

²⁰ Karl Ernst Georg Hemeling, *English-Chinese Dictionary of the Standard Chinese Spoken Language (官話) and Handbook for Translators* (Shanghai: Statistical Department of the Inspectorate General of Customs, 1916), p766. 沈国威『近代英華華英辞典解題』を参照してください。

²¹ 南懷仁著、高華士英訳、余三楽中訳、林俊雄校：『南懷仁の〈欧洲天文学〉』(*The Astronomia Europaea of Ferdinand Verbiest S.J.*)、大象出版社 2016年版、p。

²² 鄭復光：『鏡鏡詒痴』、「序」、p1。

(二) 19世紀半ば以降：埠頭都市における西洋人のソーシャル活動

1842年の『南京条約』の調印で、中国対外交流の広州時代が終わった。開港させられた五つの埠頭都市に船舶と貨物が集まり、にぎわった。遠洋から船に乗ってわたってきた西洋人の日用品の中で、マジック・ランタンがあった²³。1850年代以降、西洋人は埠頭都市で居住地を形成し、協調と管理のための機構を設置しただけでなく、民間団体を結成し社会サービスを提供した。その西洋人居住地で行われた様々なソーシャルイベントにおいて、マジック・ランタン講演とパフォーマンスが公衆の娯楽様式として大いに輝いた。

1860年代になると、寧波図書倶楽部（NingPo Book Club）はよく外国人居住地の中で夜の講座を開いていた²⁴。1868年5月に行われたシリーズ講座では、地元の事情が紹介されたが、内容は「中国の人口」や公共衛生委員会、戯曲など様々である。マジック・ランタン講演はその一つである²⁵。

1884年4月、フライヤー（John Fryer,1839—1928）がイギリス皇室アジア協会（Asiatic Society）の上海支会で「中国人の贖罪観念」に関するマジック・ランタン講演を行って、人気を獲得した。1885年12月2日、イギリス租界の禁酒会堂（Temperance Hall）²⁶で同じ講演が実施され、同じくマジック・ランタンを使用した²⁷。

1887年4月13日、「上海文学と弁論協会（Shanghai Literary and debating society）」は禁酒会堂で講座を開き、副会長のフライヤーは自らマジック・ランタンで「中国人の歴史上における道德観」について講演をした。講座の中、フライヤーはスライドで中国絵師が描いた絵を展示し、古人の道德に関する中国の史話を紹介した。ところが、芸術的に評価が低かったようである²⁸。1887年4月27日、フライヤーは同じ場所で上海キリスト教青年会（YMCA）に講座をしたが、テーマは「スコットランド高地の旅」であった。マジック・ランタンでスコットランドの美景と観光コース、方法と名勝などを紹介した²⁹。

また、マジック・ランタンは租界における高等西洋人の社交活動で、重要な娯楽様式として活躍した。1893年6月、上海競馬倶楽部（Race Club）が喫煙音楽会（Smoking Concert）を催したが、バイオリンや歌の演目のほか、マジック・ランタンで写真を上映し、過去数年の上海での競馬活動と試合に

²³Edward Belcher, NOTES OF A VISIT OF H.M. SHIP SAMARANG, UNDER CAPT. SIR E. BELCHER, C.B., TO THE BATANES AND THE MADJICOSIMA GROUPS, in 1843-44. *The Chinese Repository* (1832-1851),1844.3.1.これらの船長のメモは1848年に単行本になってロンドンで出版された。Edward Belcher, Narrative of the voyage of H. M. S. Samarang, during the years 1843-46, (London: Benham, and Reeve, 1848)

²⁴廖樂柏著、李筱訳：『中国通商口岸——貿易と最初の条約港』、東方出版中心2010年版、p214。

²⁵NINGPO BOOK CLUB、*The North China Herald and Market Report* (1867-1869), May 9, 1868,p. 213.

²⁶1883年の『上海行名録』では南京路18号にあるという。The North China Desk Hong List,1883.1,p29を参照してください。

²⁷NEWS OF SUMMARY、*The North - China Herald and Supreme Court & Consular Gazette* (1870-1941);Dec 9, 1885,p.646.

²⁸Shanghai Literary And Debating Society, *The North-China Herald and Supreme Court & Consular Gazette*(1870-1941),Apr 22.1887,p.440.

²⁹Shanghai Young Men's Christian Association、*The North-China Herald and Supreme Court & Consular Gazette*(1870-1941),Apr 29.1887,p.472.

参加した馬、騎手などを展示した。³⁰

北京でも同じ現象が現れている。1858年に調印した『天津条約』で外国公使の北京駐在を許容して以来、1870、1880年代まで各国の北京駐在大使とその家族、宣教師たちがチャリティーイベントや娯楽イベント、一般講座などの場で社交サークルを形成した。特に美以美会（Episcopal Methodist Mission）は毎年冬になると、北京で隔週ごとに講座を開いていた。

（三）中国内陸地域の都市・農村での宣教活動

マジック・ランタンが宣教に使用されるようになったのは、19世紀に西洋宣教師たちが中国の内陸地方で行った活動に関係していると思われる。1893年、安徽省宣城で布教活動をしている牧師のジョージ・ミラー（George Miller）が中国農村布教報告をまとめた。中では、次の文句が見られる。

マジック・ランタンは農村の布教に非常に使える道具である。誤解を招いたりもするが、念入りに説明してあげたら、スライドでの布教は多くの場合、とても分かりやすい方であって、全体的に満足できる効果が期待できる³¹。

1870年12月22日、美以美会（Methodist Episcopal Mission）の年度報告でも、福州の現地宣教師助手を集めて研修させ、卒業試験とシーズンごとにテストを受けさせたと書いている³²。

1882年の北京では、教会の礼拝がマジック・ランタンを使用したパフォーマンスで周辺の住民を大勢呼び寄せることに成功した。教会もそのことで回りの中国住民と親しい関係を結び、「有用な情報」を流すこともできた³³。1886年、Rev.W.P. Sprague牧師が遼寧省の牛庄に布教しに行った。友人の勧めで、天津や北京でのほかの宣教師らの経験を学んで、マジック・ランタンを布教活動に用いた³⁴。1886年11月26日、エドワーズ博士（Dr. Edwards）が山西省太原で行った夜間幻灯講座は、地元で影響力を持つエリートを引き寄せて、大変いい効果を得た³⁵。

1891年のイギリス宣教師イヴァンス（Edward Evans）の記録によれば、彼が山東省青州府（現在の山東省青州市益都鎮益都城）で夜間マジック・ランタン講座を開催することで地元の店のオーナーたちを引き寄せてみたが、その効果はかなり満足できるものだったという³⁶。1893年の山西省太谷県では、紳士・教員からなるエリート階層がREV.D.H.Clapp牧師を招いて、三日連続で夜間マジック・ラ

³⁰The Race Club Smoking Concert, *The North - China Herald and Supreme Court & Consular Gazette* (1870-1941), Jun 30, 1893, p.951.

³¹Miller, George, "Localized Work," *The Chinese Recorder and Missionary Journal* (1868-1912), Aug 1, 1893, p.362

³²*The North - China Herald and Supreme Court & Consular Gazette* (1870-1941), Jan 4, 1871.

³³"Outports: Peking," *The North - China Herald and Supreme Court & Consular Gazette* (1870-1941), Feb 7, 1882, p.155.

³⁴W.P. Sprague, "Editorial And Notes And Missionary News," *The Chinese Recorder and Missionary Journal* (1868-1912), Feb 1, 1886, p.80.

³⁵"Extracts From Letters," *The Chinese Recorder and Missionary Journal* (1868-1912); Mar 1, 1887; p.121.

³⁶Edward Evans, "Missionary News," *The Chinese Recorder and Missionary Journal* (1868-1912); Apr 1, 1891, p.189.

ンタン講演をさせたという記録も残っている。最後の夜、牧師が宗教の写真ばかり展示したという。このマジック・ランタン講演はおよそ300人の観客を集めて、そのお礼に紳士たちは太谷県の教会学校に寄付金を寄せた³⁷。

1902年、江西省九江地方の廬山牯岭街にも教会主催の娯楽目的の幻灯講座が開かれるようになり、児童を含む民衆に向けて催された。このように、幻灯講座は既に中国の内陸地域における布教活動と民衆の引き寄せの重要な手段になった³⁸。

1897年初め、京師大学堂の総教習丁韞良 (W.A.P.MARTIN) が西洋の科学手段を介した布教活動の経験をまとめる際、科学布教活動の実践において、極めて重要なものが四つあると指摘した。そのうち一つが廉価な科学おもちゃ (toy)、例えばマジック・ランタン、グラホーン (graphphone)、光学、電気或いは蒸気設備などの活用だという³⁹。ここで、特にマジック・ランタンが中国での布教活動に広く使われた理由として、廉価と便利をあげている。

(四) 宣教師の医学教育における人間の身体構造の展示

丁韞良が言及した科学布教活動のほかに、19世紀から中国にわたってきた宣教師たちは医学による布教活動を積極的に展開してきた。医学布教活動の日常的な作業として、マジック・ランタンで人体の骨格や筋肉、内臓器官、血液循環系などの展示が一般化されてきた。イギリスのロンドン会のドージェン (John Dudgeon, 1837—1901) 宣教師がその中でも最もマジック・ランタンを使用し、而も全体的に認識を持った宣教師の一人である⁴⁰。

(五) 埠頭都市における新型学堂教育

1840年代に五つの埠頭都市が指定されて以来、これらの町で教会学校が数多く建てられてきた。1860年代に入ってから中国人が作った新型書院や学堂も設けられるようになった。中では、西洋の言語と文字、科学と文化が教えられ、マジック・ランタンも重要な教具として使用された。1848年、モリソン教育協会 (Morrison Education Society) が第十回の年次報告で、寄付者に書籍以外の教具の寄付を呼び掛けたが、中にはマジック・ランタンが含まれている⁴¹。1877年2月23日、上海格致書院の専門委員会が教具の寄付について寄付者に要請を送ることに関する会議を開き、できればロンドンに注文したいとしたが、中には機械エンジンのモデルやマジック・ランタンが含まれた⁴²。

³⁷“Shansi Notes: The Late Frost An Entertainment Widespread Suffering The Yearly Balance、Our Own Correspondent,” *The North - China Herald and Supreme Court & Consular Gazette (1870-1941)*, Mar 10, 1893, p.338.

³⁸George A Clayton, “Correspondence: Magic Lantern Exhibitions At Kuling,” *The Chinese Recorder and Missionary Journal (1868-1912)*, Jun 1, 1903, p.304

³⁹Martin, W.A.P, “Western Science As Auxiliary To The Spread Of The Gospel,” *The Chinese Recorder and Missionary Journal (1868-1912)*, Mar 1, 1897, p.111.

⁴⁰ドージェンに関する研究は高晞『ドージェン伝：イギリス宣教師と清末の医学近代化』、復旦大学出版社 2009 年版。

⁴¹“The Tenth Annual Report Of The Morrison Education Society For The Year Ending Sept. 30, 1848,” *The Chinese Repository (1832-1851)*, Jan 1, 1849, p.3.

⁴²John Fryer, “Public Meeting: The Polytechnic,” *The North - China Herald and Supreme Court & Consular Gazette (1870-1941)*, Mar 15, 1877, p.26.

17世紀初めごろの光学おもちゃから埠頭都市指定後の西洋人の社交生活のコンテンツまで、中国におけるマジック・ランタンの役割はその早期で、娯楽に偏っていたことがわかる。ところで、その安価で便利な性質により、また宣教師たちの足跡を追って中国の都市と農村を遍歴したことから、民衆の引き寄せに役立つとともに、教育方法に娯楽性が生まれ、期待以上の役割を果たすようになった。中国の一般人も「目で見て確かめた」ことから、自分自身の感覚的な経験に頼ることに慣れてきて、その結果、西洋の宗教を身に纏ってやってきた「科学」は経験が裏付けたため「幻」ではないという見方に至ったわけである。

3 西洋の「器」と中国：製作、上映と伝播

(一)製作

19世紀半ばから中国の内陸地域で布教活動を展開してきた宣教師にとって、マジック・ランタンはその補助的な道具になった。そこで、地元でもマジック・ランタンが作られるように、投影装置とスライドの作製方法が詳しく説明されるようになってきた。

1873年、イギリスロンドン会の宣教師ドジェン (John Dudgeon) はその『中西見聞録』の第9から第12回で挿絵入れの「鏡影灯説」を連載し、「鏡影灯」(マジック・ランタンのこと)の制作方法を詳しく説明し、サイズや材料を明記した図案も載せていた。

『万国公報』の1880年の紙面を見れば、「雑事」の欄で『鏡影灯説略』が載せられていて、中では設備の原理や投影の方法、うまく投影するためのコツまで詳しく紹介されている⁴³。ドジェンの「鏡影灯説」より簡略的で、投影原理だけ述べていた。おそらく「西洋鏡の見破り」という視聴者側の好奇心を満足する記事だったろう。それに対して、ドジェンの記事は図案のようにそのまま作ることもできるものだった。

他にも中国で活動していた西洋人がカメラでその見聞を記録するようになっていたが、彼らによって写真と撮影、現像の技術がシェアされ、素人の撮影協会まで組織され、講座やコンクールが色々催されてきた。中にはスライドの製作課程が含まれている。

1905年11月2日、J.Hervey Longhurstが在中西洋人の上海素人撮影協会で「スライド」(Lantern Slides)の製作の講座を開いたが、講座では優れたスライドの例を50枚ほど展示し、現像や処理の仕方について色々説明した。上海素人撮影協会は1913年と1914年にもこのような講座を開き、スライドの製作と使用について教授した⁴⁴。

1937年前後、中華書局は上海で「中華教育用具製造工場」を設置し、そのカタログを見れば、既に

⁴³ 『鏡影灯説略』、『万国公報』第589期、1880年5月15日、p18。

⁴⁴ “Shanghai Amateur Photographic Society”, *The North - China Herald and Supreme Court & Consular Gazette (1870-1941)*, Nov 3, 1905.

自分で射影灯（マジック・ランタン）の製造ができたことがわかる⁴⁵。

（二）上映

上述の教会内部での天文学や動物学などの教授で、視覚による体験で宗教信仰への認知を固めることにおけるマジック・ランタンの他、19世紀の後半、上海を含む埠頭都市で生活する中国人もスライドで「搬演影戯」を演じて、寄付金の募集に使用した。

1885年、広東・広西と山東地域が災害に遭われた際、顔永京牧師は世界周遊の写真をスライドにして、格致書院のロビーで「搬演影戯」を演じて、寄付金を呼び掛けた。11月21日と23日だけで「影戯図」を80枚上映し、その内容は西洋各国の都の様子と著名都市の風景が含まれ、入場料の「洋半元」が全て被災地に寄付された⁴⁶。あまりの人気で、11月5日に追加上映が行われた⁴⁷。更に、11月28日と12月3日に二回追加され、「新戯」と言って新しいスライドを数十枚加えた⁴⁸。一回目の追加上映はやはり五角の入場料を徴収し、二回目は新しいスライドを演じ、料金が二角になったが、全部寄付金とされた。

格致書院自身もよく「影戯灯」で社会向けの無料医学や西洋の政治制度の講座を開いた。1897年11月6日、影戯灯で「全体の各図を演示し、視聴に供した」⁴⁹し、1897年11月30日は艾約瑟 (Joseph Edkins) を招いて「イギリス皇太后ビクトリア在位六十年中の政治を語り、影戯灯で写真などをみせ」、「各種鳥獣図」も展示した⁵⁰。1899年3月29日、ヨハン書院の教習の李思を招いて、影戯灯で「天文、事の理を講じて、視聴に供し、図を以て解説した」⁵¹。

格致書院だけでなく、虹口中西書院のような新型書院もよく影戯灯で西洋科学の「格致之理」を教授した⁵²。これらの新型書院での影戯灯講演は、内容こそ専門性のある科学知識や西洋の政治制度だが、形としては社会大衆に向けたものである。これも初期のマジック・ランタン講演の一般的な様式である。それで、専門な科学知識が少数のエリート階層だけでなく、社会の一般大衆に向けても伝播できるようになった。

1919年、1917年に創設された「Yangzepoo Social Center」（楊樹浦コミュニティセンター）は夜7時から9時まで定期的にマジック・ランタン上映会を開くようになり、上海の名の知られた演説者を招いて、多くの観客も呼び寄せた⁵³。これで、マジック・ランタンの上映会は新型学堂や教会、社会組織などにとって、講演・集会・教育の重要な手段の一つになっている。

⁴⁵ 『自製両用幻灯』、『申報』、1937年12月15日、第2面。

⁴⁶ 『影戯移賑』、『申報』、1885年11月19日、第4面；1885年11月23日、第1面。

⁴⁷ 『観影戯后記』、『申報』、1885年11月25日、第1面。

⁴⁸ 『重演影戯』、『申報』、1885年11月28日、第3面。『影戯翻新』、『申報』、1885年12月3日、第2面。

⁴⁹ 『格致書院講論西字啓』、『申報』、1897年11月16日、第6面。

⁵⁰ 『艾約瑟先生講論西学啓』、『申報』、1897年11月30日、第6面。

⁵¹ 『格致書院演講西学啓』、『申報』、1898年3月29日、第6面。

⁵² 『影戯大観』、『申報』、1902年1月29日、第3面。

⁵³ “The Yangzepoo Social Center, Djen, S.C,” *Millard's Review of the Far East (1919-1921)*, Dec 27, 1919.

(三) 伝播

19世紀半ばから20世紀初頭にかけて、影戯灯講演が上海や北京、長沙などの都市で、大衆娯楽と教育普及の様式になってきた。スライドへの社会の需要もそれに従って増えてきた。当時のスライドメーカーと言えば、イギリスの会社がほとんどで、有名なものはGeorge Richardson&Co.,やMagic Lantern Journal Company limited., 「GEM」 dry Plate Company limited., などがある。前者がイギリスリバプールにあるディーラーで、1868年の『北華捷報』で広告を掲載したことがあって、主にマジック・ランタンやスライド (slides) を販売し、また望遠鏡や顕微鏡、蒸気機関モデルなど、科学教育の補助設備の販売も経営していた⁵⁴。後者はスライドのメーカーだが、その製品はいまだに実物が見られる。当時、マジック・ランタンとスライドとのワンセットの値段が7シリング6ペンスから22パウンドの間であった。顔永京牧師が持ち帰って、1885年にパフォーマンスに用いた世界周遊奇怪風景のスライドはおそらくイギリス製であったろう。今日も似た内容のものが見られる。影戯灯やガラススライドの販売を見れば、上海格致書室や中西大薬房などが扱っていて、イギリス製が多く、凡そ2元から2元半ぐらいであった⁵⁵。

スライドを購入するにはコストが高すぎたことから、スライドのレンタル協会を作る動きが出た。1886年8月、Brown. Frederickの『教務雑誌』への投函では、その提案が盛り込まれた。更に、スライドのテーマは科学や建築で、上映会がいつも同じスライドを使うわけにはいかないから、スライドのリストと貸し出し志願者リストを作って、スライドの交換と流通に役立てようと提案した⁵⁶。

イギリスで製作、上海など埠頭都市の薬屋と本屋で販売、或いはレンタルで流通するのが、早期のスライド伝播の主要な様式である。

4 劇場の中の知識

1871年、メソジスト教団が福州で布教活動を展開した時、マジック・ランタンで天文学や日食について説明した。この方法で、キリスト教は現地宗教に比べて、より経験主義的に適合し、いわばより「科学的」なイメージを獲得した。これはキリスト教に対する中国での理解に大きな影響を及ぼした。

1876年9月25日、アメリカ人が北京の灯市口会堂でマジック・ランタンショーを催し、観客を集めた。当時の同文館の総教習丁韞良が学生たちとともに見に行ったことがある。見学の結果、観客は西洋の知識系統について論理的に理解できたという⁵⁷。

⁵⁴The North China Herald and Market Report (1867-1869), Jul 11, 1868.

⁵⁵『影戯灯販売』、『申報』、1887年1月18日、第5面；『影戯灯販売』、『申報』、1889年4月16日、第5面；『新到各貨中西大薬房・影戯灯片』、『申報』、1889年9月22日、第6面。

⁵⁶Frederick Brown, *The Chinese Recorder and Missionary Journal* (1868-1912), Aug 1, 1896.

⁵⁷小山居士：『観鏡影灯記』、『万国公報』第419号、1876年9月、p26。⁵⁸CHINESE NEW YEAR HOLIDAYS AT WENCHOW, *The North - China Herald and Supreme Court & Consular Gazette* (1870-1941), Mar 2, 1888.

スライドの内容は偉人の紹介から国体、博物院から昆虫、最終的に聖書の物語を盛り込んで、身近なものや具体的な知識の紹介から信仰のような大きな話へ帰結していく。中国人の観客たちは、スライドの一枚一枚から西洋そのものの全体のイメージを確立していった。百聞は一見に如かずと言えよう。経験が積み重なるといつか必ず知恵と観念が生まれる。自然観察を通じて西洋人の行動原理と倫理観に対する理解を深めることは、自然科学から人文科学へと、西洋に対する認識が深まったことである。

1888年の春節を祝って、温州キリスト女児学校も男児学校も休みに入った。校長のBrazierが学校に残った生徒のために、鏡影 (lantern sliders) を演じた。その後、学堂で幻術が使われたうわさがあったという間に広がって、仕方なく生徒の親を集めて、スライド上映をもう一度見せた。それを見ても釈然としなかった親の反応から、校長は温州の道台や政府の職員に向けて、教会でもう一度上映会を行った。今回、上映会に参加した地元のエリート階層にたいへん満足してもらえたことから、スライド上映が一気に温州で広まり、料金徴収や寄付の募集などにも使われるほど発展した⁵⁸。このように、視覚に基づく経験的且つ実証的な見学体験は、スライドの上映を「幻術」のイメージから脱却させ、したがって、キリスト教の布教や宣教師たちが紹介した「科学」も感覚の経験で認識できる現象だという理解をもたらした。

1883年冬、丁韞良が北京のメソジスト教会 (Methodist Chapel) で中国語で夜間講座を開いたが、その際もマジック・ランタンで外国の都市を展示し、その道や建築物、照明、水道などを引いて中国と比較して説明した。展示されたのはロンドンやパリ、ヴェルサイユ、ベニス、ミラン、フィレンツェ、ローマ、ナポリなどであった⁵⁹。

スライドショーは自分の目で見られないもう一つの世界を観客の前で再現した。天文現象も人体の構造も、血液の循環も、そして経験できない外国の景観も自然災害の様子も、すべて自分の目で確かめることができた。そこで生まれたのが今まで個人の感覚経験で直接獲得できずに、論理的にしか把握できなかったはずの認知である。

スライドショーはこれらの認知を劇場的な空間に引き込んで展示し、自分の目で主催者が故意に組み立てた現象を目撃させるわけである。したがって、知識の獲得方法が、直感経験に基づく認知から、抽象的な論理上の推理へと、完全に取って代わった。このような認知手段の定着につれて、感覚経験で「合理的に」判断する傾向も顕著になってきた。知識の習得においても、より感覚の経験を信頼し、経験が全く及ばない分野だけ抽象的推理を借りようになっている。

⁵⁸CHINESE NEW YEAR HOLIDAYS AT WENCHOW, *The North - China Herald and Supreme Court & Consular Gazette (1870-1941)*, Mar 2, 1888.

⁵⁹“Our Own Correspondent,” *The North - China Herald and Supreme Court & Consular Gazette (1870-1941)*, Mar 5, 1884, p.253.

まとめ：中国近代知識「規訓」とエリート層の発信者における変化

マジック・ランタンは17世紀にヨーロッパで登場して以来、宣教師の活動と海外貿易に従って中国にも伝わってきた。宮廷から民間に至るまで、その初期体験は娯楽と好奇心を満たすパフォーマンスに偏っていた。19世紀初めごろになって、キリスト教・新教の宣教師が中国での布教活動を始めてから、「影戯」も娯楽や幻術の見世物から「科学布教」の重要な道具となり、西洋の科学と経験主義で超越的な教義を検証し伝播する手段となってきた。

19世紀末から20世紀のはじめにかけて、「マジック・ランタン」の使用は教育と伝播の様式を大きく変えてきた。このような変化はちょうど、知識の生産と流通、消費のグローバリゼーションの背景の下で発生したことを考えれば、なかなか興味深い現象と言える。

知識の伝播がエリート階層の内部からより広い民衆レベルに移行しただけでなく、英米諸国で誕生した近代教育技術と教室教育の方法も東アジアで推進され、知識の表現が新しい様相を呈してきた。この新しいパラダイムの主な特徴として、細分された分野において経験主義のルールと一定の台本で演示することである。

19世紀の半ば頃、埠頭都市の新型学校が盛んになり、西洋の学科知識や言語課程を開設した。新型教科書を使用した授業の他、影灯講演が重要な教育手段になってきた。教室で使用されたスライドは、その大部分がイギリスで製作され、台本（script）と教育参考書とセットで出版されていた⁶⁰。

中国の近代における知識の生産と流通に関しては、具体的な訳語や概念、テキスト、コンテンツと分類体系などが外部から輸入されただけでなく、その表現と伝授の形式も同じく西洋からわたってきたものが多い。例えば、スコットランドのチャンバー兄弟（*Robert Chambers & William Chambers*）が1835年に編集し出版した普及教育叢書（*Chambers' Educational Course*）は江南製造局が一部翻訳・紹介されたから、学校の教材と清末期の知識人が西洋を知るための重要なテキスト、さらに科挙試験と合法性論証のための「知識的資源」になってきた⁶¹。同じように、「影灯講演」が新型学堂の教育と公開講座の重要な補助的手段になったのをきっかけに、このような表現のプログラムが近代的な「知識規訓」になって、中国の「現代性」の形成を深く影響するようになった。

物のレベルから、マジック・ランタンも鏡影ももとはといえば西洋からの輸入品である。しかし、人々がそれを使っていくうちに、機能の拡張（「放字」など）に力を入れるとともに、物の現地化も試みてきた。例えば、ドジェン、フライヤー、丁韋良、鄭復光らが中国でマジック・ランタンを作り、現地で獲れる絵具でスライドを作成し、照明の問題を解決するための方法を詳しく紹介し、論じていた。このような試みの結果、二十四孝図のような現地の内容も外来器物によって経験的に顕示される機会を得た。また、マジック・ランタンから「鏡影灯」まで、西洋器物の現地化がグローバルな知識の流動における「現地生産」の重要な一環になってきたことにも十分留意すべきである。

⁶⁰T.C.Hepworth, F.C.S., *The Book of Lantern being A Practical Guide to the working of the optical(of Magic)Lantern* (London:Wyman&Sons,1888).

⁶¹ 孫青、氷野歩訳：『西洋の政治経済学教本の東アジアへの旅 —Chambers 編 Political Economics の東アジアでの数種類の訳本を中心に』、『文化交渉による変容の諸相』、2010年版、p279—310。

それと同時に、19世紀の影灯講演の流行により、知識層のエリートの集い方や発信者にも深く影響し、大きな変化をもたらした。幻灯機は一部が現地で製造できたかもしれないが、スライドはほとんどイギリスからの舶来品であった。これらのスライドは上海などで販売、レンタル、流通され、そして新型書院や教会学校、コミュニティの文化センター、知識人団体の内部などで流行し、西洋の科学や政治制度を学ぶために活躍した。更に、閉鎖した団体の中から一歩出て、公衆に向けて社会的に開放された知識の普及と社会教育、社会動員の道具になって流行ってきた。

19世紀末になると、宣教師や新型書院の西洋人教習だけでなく、国内の知識階級のエリートたちも「影灯講演」に乗り出した。地方の文人は詩文の創作や共同の祭祀など一定の団体の内部での閉鎖した活動でコミュニティを維持してきたが、「演影灯」の登場はこのような活動を社会に向けて開放させた。文人の結社が社会教育の団体になってきて、その後の社会向けの演説に大きく影響している。この場合、知識人たちは書面の表現の後ろに隠れた「合法性表現」者から、教育者と演説者になってきた。こうした発言の様式の変化は必然的に一連の社会変動をもたらしている。書写の内容や方法の変化がその一つである。さらに言えば、このような変容はその後にだんだん浮き彫りになってきた文人の「士」から「埠頭知識人」の「制度的なメディア人」へとキャラクターの転換において、ますます顕在化していくと言える。

19世紀後半、「演影灯」が上海や北京、長沙など大都市の民衆娯楽様式に定着した。海外の不思議な光景や、人の世の災害、そして戦争場面を見るメディアになってきた。甲午戦争（日本史では「日清戦争」という。訳者注）と日露戦争の間、日本が戦争をテーマにしたスライドをたくさん作成し、戦況の展示と戦史の物語に使用した。そして、これらのスライドは医学教育などのルートで中日両国の国民の視野に入った⁶²。したがって、日本の漢字語「幻灯」はこれまで流行っていた「鏡影灯」や「影戯」に取って代わり、マジック・ランタンの通称として一般化した。その後も幻灯とスライドが科学教育や教育普及、基礎教育の重要な教具になり、その製作技術と上映のルールにおいては、日本とソ連に前後して影響を受け、その間の変化はより多彩で、歴史的に深い影響を残してきたが、紙幅の関係上、本論文では詳しく論じる余地がなく、今後の課題としておきたい。

⁶² 服部喜太郎編：『日清戦争大幻灯会』,東京、求光閣、1894。